
心剣伝

キャプテン☆ラブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心剣伝

【Nコード】

N9685Z

【作者名】

キャプテン☆ラブ

【あらすじ】

魔王にさらわれた姫を助けるために、利き腕を失った剣士が冒険をする物語。

プロローグ

「なんでこんな事になってしまったんだ・・・」

そうつぶやいた男【ブラスト・D・ジークフリード】、彼はラスタ国の姫に仕える王宮騎士であり、この物語の主人公だ。

ブラストは、姫を婚礼の為に隣のブルーリッジ王国へ送り届ける任務の途中であった。

だが、国境の林道で数え切れないほどの数の魔族の襲撃に合い、100名いた兵士達は全滅し残っているのは彼1人となっていた。

ブラストの自慢であった白銀の剣と王宮騎士の鎧は、赤や緑の魔族の返り血を浴びてその輝きを失っていた。

そして、守るべき相手であるフロリーナ姫も今まさに1人の男によって連れて行かれるところである。

しかし、ブラストは目の前にいるその男に対し、今までに無い恐怖を感じていた。

恐怖の対象であるその男は自らを【魔王】と名乗り、魔族の群れを指揮していた。

その姿は、全身を黒く輝く鎧で包み、青く腰まで伸ばした髪をなびかせ美しいとさえ思える程だった。

そして、何よりも特徴的だったのは長く尖った耳だ。美しく思えるのも当然であった。魔王はラスタ国では物語でしか

見る事のできない【エルフ】という種族なのだから。

「彼は私の友達なの！殺さないでっ！」

魔王の腕にしがみつки、そう叫んだのはフロリーナだった。

林の中に響いたその声でブラストは恐怖を振り払い、剣を握る手に力を込めた。

対し、魔王はフロリーナへと優しい笑顔を返し、彼女を自分の背

中で隠すようにブラストの方へ向き直して言った。

「人間よ。もう1度言おう。私の名は魔王アクロポリス。

私とて、人間との無駄な争いは好まん。フロリーナ姫は私がもらい妃とする。大人しく渡してくれるならば、貴様の命は助けてやろう。そして、ここにいた人間達が死んだのは、先ほどこの条件を飲まず我等に攻撃をしてきたからだ。

貴様も姫の友人だというならば、姫が何を望むかぐらい解るだろう。

」

その言葉を聞いたブラストの心の中には、魔王に対する怒りしか無くなっていった。

「魔王よ。おまえに姫様の何が解ると言うのだ！

姫様は、我等ラスト国の国民を守る為にブルーリッジ王国の王子と結婚するという条件を飲んだのだ。

その崇高な思いを、お前達のような魔族に邪魔させる訳にはいかない！」

そう言葉にし叫ぶ事によってブラストの身体に力が湧き上がり、先ほどまでは恐怖の対象でしかなかった魔王でさえ倒せるという気がしてきた。

『魔王までの距離は十数メートル・・・いけるっ！』

リーダーであるアクロポリスさえ倒せば残りはどうにかなるとブラストは確信し、再び剣を握り直すと間合いを詰めるため全力で踏み込んだ。

【音速剣】

音速剣とは本来ブラストの父である剣聖マールボルの奥義の1つである。

音の速さを超えるスピードで踏み込み振るわれる剣の威力は凄まじいものである。

だが、この剣の極意は速さではない。踏み込み時に左右への動きを入れる【く】の字の動きによって敵の視界から姿を消す事だ。

この剣技は幼少の頃から父と旅をして、その姿・戦い方を見てきたブラストだから使う事が出来るのだ。

だが、彼のスピードや技術は剣聖の域には遠く及ばず、音速とまではないだろう。

しかし、敵の死角を突くこの攻撃を防ぐ術は無い。

案の定、魔王アクロポリスでさえ反応する事が出来ない。

ブラストは勝利を確信し、動かないアクロポリスへと渾身の力で剣を振りぬいた。

『おかしい・・・』

ブラストはそう感じていた。今までの最高の速さで出した音速剣は、確かにアクロポリスを斬りさいたはずだった。

だが彼の剣には、その手応えが無かったのだ。

不思議に思ったブラストは、手応えを確かめる為に自分の剣を見た。

しかし、そこには剣は無かった。

正確に言うとブラストの右肩、その先が無くなっていたのだ。

振り抜いたはずの剣も腕も無ければ、手応えが無くて当然である。

「うわあああああつ！」

ブラストは思いもよらぬ光景と、その痛みに耐え切れず両膝を着き叫び声を上げた。

「これだから人間は・・・」

アクロポリスは目の前で叫び続ける騎士を哀れむような目で一瞥すると、その男の頭へそっと手をかざした。

その瞬間ブラストの身体から、痛みという感覚が消えた。

同時に目の前が真っ暗となり、意識も消えていった。

「ごめんなさい・・・」

フロリーナが最後まで自分を守る為に戦い倒れた騎士に対してか

けた言葉も、彼には届かなかった。

プロローグ（後書き）

読んでいただいた皆様にありがとうございます。

私は国語の成績も悪かったし、これが初めて書く小説なので読みにくい所もあってすみません。

これから物語の主人公と共に成長し、読んでてワクワクできるような作品にしていきますのでよろしく願います。

第1章「墮れた剣」 1

物語の主人公が眠りにについている間に、この世界について語ろう。

かつてこの世界には、人間やエルフ、ドワーフや獣人など多くの種族がいた。

人間は知恵と探究心で世界について研究をし、エルフは自然を操る力【魔法】を使い、ドワーフはその手先の器用さで武器や道具を作る。

そして、獣人は強靱な肉体で狩りをした。それぞれの種族が自分たちの得意な分野で能力を発揮し、共存していた。

だが、人間達はその探究心からか他の種族の能力についても研究をし、その力を手に入れてしまったのだ。

それが、『共存』という平和の形を乱す原因となった。

今より500年ほど前、ブルーリッジ王国の国王であったドラムは自分達人間以外の種族と共存する必要があるのかと疑問を抱いた。昔とは違い人間は、エルフの様に魔法を使え、ドワーフの様に鍛冶も出来る。それに、獣人の様に狩りや戦いも出来るのだ。

人間が最も偉大な種族だと考えたドラムは、他の種族を排除しようとして戦争を始めたのであった。

始めは争いを好まない他の種族達は、大人しく人間にその土地を明け渡していった。

だが人間達の勢いは土地を奪うだけでは収まらず、多くの種族の命をも奪っていったのだ。

他の種族達も、ただ意味の無い虐殺によって仲間の命が奪われていくのをいつまでも黙って見ている訳が無かった。

1人のエルフを筆頭に多くの種族が手を結び、自らを【魔族】と名乗り反撃を開始したのだ。

その結託した力は凄まじく、人間との立場は逆転していた。そして、今度は人間たちが土地を奪われ多くの命が消えていった。

人間の王ドラムは自らの過ちを悔い、魔族へ戦争を終わらせる為の使者を送った。だが、一方的に始められた争いを魔族が許すはずが無かった。

今や共存することの出来なかった人間という種族は、必要の無い存在となっていたのだ。

ある日、絶望する人間達の元へ1匹の白い竜が舞い降りた。そして、1人の少女に問いかけたのだ。

「オマエはなぜ泣いているのか。」と

少女は答えた。

「魔族達に親が殺された。」

「なぜ、オマエの親は魔族に殺されなければいけなかったのだ。」

「そんなことわからない。」

その言葉を聞いた白竜は、この争いが無意味であると悟った。

少女の涙に心を打たれた白竜は、戦場の中心へとその大きな翼を広げ飛び立った。そして、争いを止めぬ人間と魔族に対しこう言った。

「なぜ、オマエ達は争いを止めないのだ。」

姿形は違えとも嬉しい時は笑い、悲しい時は涙する。それは同じではないのか。

もし、オマエ達が同じでは無く力のある者が支配して良いと言うのなら、オマエ達よりも力のある私達ドラゴンが支配するべきではないのか。」

白竜はそう言うと、天に向かい眩い閃光を吐き出した。その閃光は、雲を貫き空のかなたへと消えていった・・・

それから間もなくこの争いは終わった。

だが、人間と魔族の間にできた溝は深く埋まることが無く、南の

大陸を人間、北の大陸を魔族が治めることとしお互いを干渉しない事とした。

その後、再び少女の元へ白竜が舞い降りこう言った。

「人間と魔族が再び無意味な争いを始めぬ様に、私はあの山へ住む事とする。

私はオマエの親になる事は出来ないが、友としていつまでも見守ろう。」と。

白竜とその少女は平和の象徴として崇められ、白竜の住む山の近くに1つの国が作られた。

それが【ラスト国】である。

やがて時が過ぎると白竜への信仰は人々の心から薄れていった。

そして今度は同じ人間同士で優劣を付け、土地を巡り争うようになったのだ。

だが魔族と人間がまた争う事になろうとは、まだ誰も思っていないなかっただろう。

第1章「墮れた剣」 2

「ここは・・・いったい・・・」

窓から差し込む日差しに、目を細めながらブラストは呟いた。

辺りを見渡すと白い天井、横にはもう1つ空のベッドがあった。どこか室内にいるようだった。

「ブラスト様が目を覚まされたようです。」

女の甲高い声が聞こえる。なんだか慌しい様だ。

ブラストは様子を確認する為、起き上がろうとした。

だが、思うように身体に力が入らずバランスを失いよろめいた。

そして、自分の右肩から先が無くなっていることに気づき、先程起こった事を全て思い出した。

「フロリーナ姫はどうなったのだっ!」

まだ上手く動かせない身体で誰もいなかった部屋を飛び出した。

その時タイミング良く現れた兵士が、彼に向かってこう言った。

「ブラスト様、国王様がお呼びです。ご一緒に来ていただけますでしょうか?」

兵士は彼に対し槍の刃先を向け、無表情な顔で構えていた。

ブラストはその様子から姫がどうなったのかを理解し、黙ってついて行く事しかできなかった。

兵士達に連行される形で連れられたのは、謁見の間だった。その段上には2人の男がいた。

白髪で長い髭をたくわえ、王座に座り見下ろしている威厳のある風貌の男がラスト国の国王『フランドリア』である。

もう1人はキノコのような髪形をして、悪趣味な派手な服を着ていた。彼は隣のブルーリッジ王国の『マントウ王子』だ。

フランドリアは兵士を下げさせると、ブラストへ言った。

「ブラストよ、いったい何が起きたというのだ。」

7日前、姫が予定の時刻を過ぎても到着しないと、マニトウ王子が心配し兵を送るとラスト国の兵と魔族が争った跡があり、そなたが倒れているのを見つけたとの事だが。」

ブラストは7日もたっているという事に動揺もしたが自分の見た事、起きた事を全て話した。

「フロリーナ姫をお守りできず、申し訳ございませんでした。」

フランドリア王は彼の口から『魔王』との言葉を直接聞く事により、事の大きさを改めて理解し沈黙した。

だが、もう1人の男は違った。

マニトウは段上から下り、片ヒザをつきうつむくブラストを蹴りつけ叫んだ。

「魔族の分際でフロリーナを妃にしようだなんて、ふざけるなっ！彼女の美しさは私にこそ相応しいのだ。それを奪われるだなんて、貴様はそれでも騎士かつ！」

ブラストは、この男の事が嫌いだった。

マニトウは自分の力ではフロリーナ姫を口説く事が出来ないとなると、王国の軍事力を使いラスト国を脅迫し和平の証として姫を差し出させようとした男だからだ。

しかし姫を守れなかった事は事実であり、ブラストには何も言い返す事が出来なかった。

「ブラストよ、そなたに任務を与える。」

魔王を追い姫を救出せよ。それまでは城に戻る事を禁ずる。」

フランドリア王のその言葉に1番驚いていたのはブラスト自身であった。

彼は姫を守れなかった事、預けられた兵を全滅させた事で自分の命は無いものだと思っていた。

「すぐに救出部隊を結成し、出撃いたします。」

もう1度チャンスを与えられた事が心から嬉しく思え、力強く応えた。

「何を言ってるんだ。貴様は1人で行くんだよ。」

ラスト国で名の知れた貴様と鋭兵100名が全滅したってんで、兵士や冒険者は賞金を掛けても誰も行こうとしなくなってんだよ。」
マニトウの思いもよらない言葉に、ブラストはついに反論した。

「お言葉ですが、今の私は利き腕を失い剣を握ることが出来ません。私1人では魔王どころか、魔族達と戦えるとは思えません。」

ブラストの言葉は事実であった。剣には自信のあった彼も、今は自分が戦う事が出来なくなっているのを知っていた。

「ブラストよ、そなた1人で行かせるのには考えがあっての事なのだ。」

利き腕を失ったそなたが再度奮起し、旅立ったとなれば兵の士気は上がるだろう。

それに、そなたの父『剣聖マールボル』の耳に入れば、たとえどの国にも仕えない剣聖であっても息子の窮地とあれば力を貸すだろう。

「

その言葉は任務が剣の握れないブラストを信用してのものでなく、父である剣聖の力を頼りにしてのものだと語っていた。

だが、今では魔王と戦えるのは父しかいないとブラスト自身も感じていた。

「かしこまりました。すぐに出発いたします。」

ブラストはそれだけを応えた。

「おお、行ってくれるか。その間、そなたの家族の面倒はラスト国で責任をもってみよう。」

それと、そなたの『姫直属の王宮騎士』の任を解き、今日からは『対魔騎隊』とする。もし、そなたについて行きたいという兵がいれば、その権限で連れてゆくがよい。

そして、用意したこの装備を使うがよい。」

渡されたのは、鋼で出来た簡素な胸当てと剣、盾だけだった。

それは、王宮の騎士が身に付けるような立派な物でなく、比較的どこでも手に入れられ駆け出しの冒険者達が使用するような物であ

った。

やはり自分はたいした期待はされておらず、父を動かす為のコマでしかないのだと感じた。

それに追い討ちを掛ける様に家族を人質にとるやり方にも絶望した。
「もし姫を無事に連れて帰ってきたら、我がブルーリッジ王国でもう1度『姫直属の王宮騎士』にしてやるから絶対に取り返してくるんだぞ。」

解ったな。」

やはり、この男は嫌いだとマニトウを一瞥しブラストは謁見の間を後にした。

第1章「墮れた剣」3

ブラストは城下町の酒場で何杯目か解らない酒を口にしていた。

彼は国王より勅命を受けた後、城内で顔を知っている数名の兵士に声を掛けていたが全て断られていた。

皆「まだ死にたくない」「家族がいるから」等、魔族との戦いを恐れての理由からだった。

それは、ここにいる冒険者達も同じ反応だった。

「こんな時に、あいつらがいてくれたら・・・」

ブラストは酒の入ったグラスを傾けながら、そうつぶやいた。

脳裏に浮かんでいたのは、ブラストと共に王宮騎士の上級試験を受けた仲間であり友人でもある『スタッド』と『エクセレント』だっ

た。『スタッド』は無口ではあるが風を読む能力に長け、弓を自由自在に操る名手である。

もう1人の『エクセレント』はお調子者でいつもタバコを吹かしているが、炎の魔術のエキスパートだ。

残念ながら2人とも今は別の任務で城を離れているが、彼らがいればきつと力を貸してくれたであろうとブラストは考えていた。

そこに1人の少年が店に入ってくるなり、元気な声でマスターに問いかけた。

「ここに姫様を助ける為に魔王と戦おうっていう冒険者はいない？」

その少年は見た目が14から16歳ぐらいの小柄で、白い頭巾のような帽子を被っていた。

装備はオレンジ色のシャツに革のベスト、緑のショートパンツとその辺の町人が身に付ける様なものであった。

なにより特徴的だったのは、背中に剣の替わりに下げられたフライパンだった。

とたんにカウンターの周辺でワツと笑い声が上がり、人が集まりだした。

だが、ブラストはそんな様子にも気を止めず飲み続けていた。

「ここは坊やの来る様な店じゃないぜ。こいつでも飲んで帰んな。」
荒々しい感じのガタイの良い男が少年の前に、カップにそそがれたミルクを置いた。

それを見ていた周りの男達は腹を抱え大笑いしていた。

「あんがとよっ♪」

少年は別に気にした様子も無くそのカップを手に取り、一気に飲み干した。

「確かに、来るところを間違えたようだね。」

ここには、ウサギやタヌキが相手でしか戦えない様な冒険者しかないようだわ。」

「なんだと。じゃあ、オマエは何だって言うんだ。」

男は頭にきているらしく、怒鳴りつける様に言い返した。

「オイラは虎だぜ。」

少年はカウンターのの上に立つと、腕を組み相手を見下ろしていた。さすがに周りで見ていただけの冒険者も、その表情は厳しいものに変わってきた。

しかし、その中心にいる当の本人はヘラヘラと笑いながら周りの冒険者達を見渡していた。

「姫様を助けに行きたいのでしたら、あちらに王宮騎士のブラスト様がおります。」

マスターは店内での揉め事は勘弁といった顔で、奥の席を指差した。

「王宮騎士か、そいつはイイヤ。」

ちよつとソコ通して。」

少年はカウンターから飛び降りると、周りの冒険者達の怒りなど気にする様子も無くかきわけながらブラストの座る席へと向かった。

「姫様を助けに行くんだろ？オイラも連れてってよ。」

思いもよらなかった言葉を聞き、ブラストは顔を上げた。

だが、そこにいるのが見るからに普通の子供だと解るとグラスに視線を戻し言った。

「これは遊びじゃないんだ。子供を連れて行くような余裕はない。」少年は臆する事も無くブラストの向かいの席に座り込み、顔を覗き込むようにし言葉を続けた。

「オイラはコルツって言うんだ。」

オイラはパチンコを使って飛んでる鳥だって落とせるし、料理も出来るから連れてって損は無いよ。

ここにいる装備だけは立派な腰抜け冒険者達よりも、絶対に役に立って。」

コルツは、あえて周りに聞こえる様な大声で言った。

この言葉に先程のガタイの良い男が反応した。

「みんな聞いたか。魔族ってのはフライパンを持ったガキでも戦えるみたいだぜ。」

それに全滅させられた王宮騎士ってのも、大したこと無いみたいだな。」

店内に今までで1番大きな笑い声が響いた。

ブラストは死んだ仲間達が馬鹿にされた怒りと酒に酔っていた勢いか、席から立ち上がるとケンカ腰で言った。

「たしかに見た目だけは一人前の腰抜け達よりは、やる気のある子供の方がマシだな。」

ブラストと男の視線が絡まった。

「おっ、やろうってのかい。」

魔族と戦おうっていう王宮騎士様の實力を見せてもらおうかつ！」

男はそう大声を上げると、ブラストへ殴りかかっていった。

だが、ブラストは酒に酔っているとはいえ騎士である。

その辺の冒険者の攻撃など止まっているも同然であった。

身体は反応し相手の攻撃を左手で防いでいたが、反撃をする為の

右腕が無かった事に気づいた。

その隙をつき、ブラストの頬に強烈な一撃が入った。

そして男は、勢いにのって2発、3発と打ち込んできた。

「騎士様ってのも、剣が無きゃ案外たいしたもんでもないみたいだな。」

男は勝ち誇った様に笑い、トドメをさせるため右腕を振りかぶった。

ドガッ！

そこにいた誰もがブラストがやられたと思ったが、音と共に倒れたのは今まで一方的に殴りつけていた男の方だった。

そして、その足元にはフライパンを持ったコルツが得意げな顔で立っていた。

「おめーら、これ以上ケンカしようってのなら、王宮騎士ブラスト様の任務を邪魔した罪で打首にするように告げ口するからな。」

コルツはそう言うどブラストの方を見て、ニコッと笑った。

「どう、オイラも役に立つでしょ♪」

そんなじゃあ、アニキ行きましょうか。」

さすがに熱くなっていた冒険者達も、コルツの言葉を聞いた後では黙って道を開けるしかなかった。

「ははっ」

ブラストは、つい笑ってしまった。

これからの自分には、こういった仲間も必要なんじゃないのかと思ってしまったからだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9685z/>

心剣伝

2012年1月9日01時49分発行